「日々の理科」（第 1876 号） 2019,-8,28

「天使のはしご（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

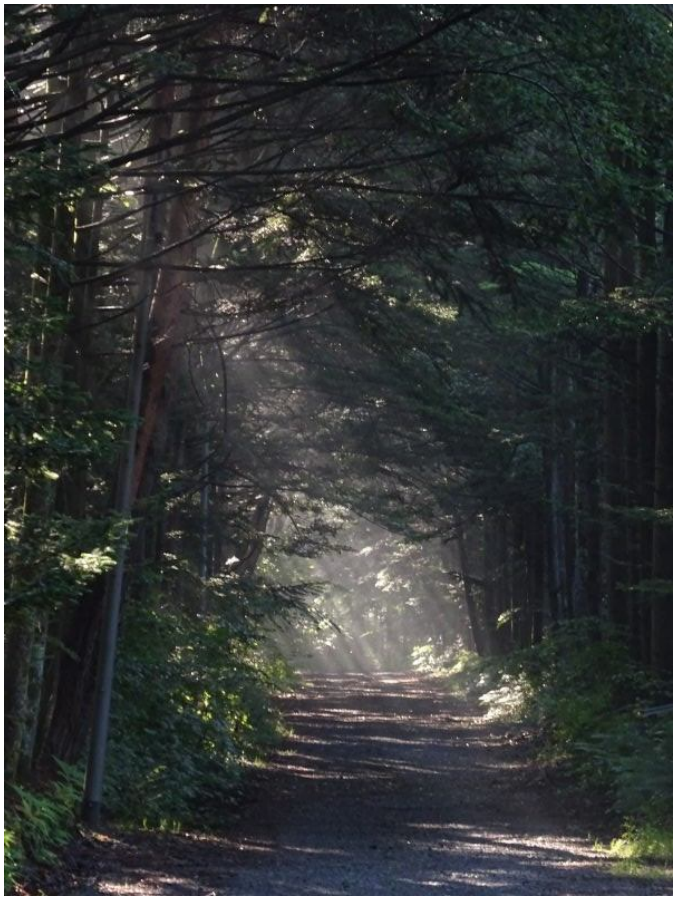
西の空に太陽が傾いている時間帯に、層積雲や高層雲の隙間から、太陽光が放射状にもれることがある。その時、大気中に適当な水滴（雲粒や雨粒）、煤塵などが存在すると、その光跡が可視化されて見えることがある。気象学の用語では「光芒（こうぼう）」というが、俗に「天使のはしご」とも呼ばれる現象だ。

（群馬県甘楽町付近）

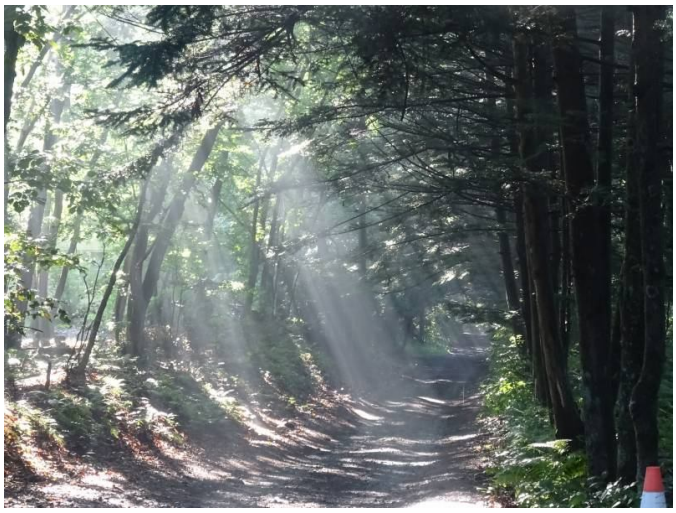
写真は典型的な「天使のはしご」で、雲の隙間から放射状に光が差している。その先端が地上に達した場所だけが、雲間に太陽が見える状態になる。

（小石川植物園）

天使のはしごは、身近な場所でも見ることができる。少し霧がたちこめた森の中で、木々の隙間から太陽光が差しているような場面だ。私はこのような場面が気に入っていて、好んで画に描いている。



８月の早朝の北軽井沢は、よく霧が立ち込める。特に前日の夕方に雷雨があった日は、翌朝必ずと言ってよいほど、霧になる。森の中に霧が立ち込め、そこに太陽光が差すと、写真のように見事な「天使のはしご」が出現する。



８月中旬の早朝、私は自転車で「天使のはしご」を探し回ってみた。森の中に霧が立ち込め、そこに朝日が差し、更にある程度広い場所があったほうが良い。写真は「大学村」の道だが、その条件にぴったりと合っている。これほどはっきりと見えるのは珍しい。天使のはしごが地面に落ちたところは、「木もれ日」の状態になっているのも面白い。